

9月はアジアマンスです。今月はアジアの国のひとつ、イスラエルの本をご紹介します。

『もちろん返事をまっています』

ガリラ・ロンフェデル・アミット／作 母袋 夏生／訳 岩崎書店 1999年
1470円 読み物

<お勧め年齢>

幼稚園☆☆☆ 小低学年☆☆☆ 小中学年★☆☆ 小高学年★★★★ 中学生★★☆
高校☆☆☆ 一般☆☆☆

(★が多い年齢の子どもにお勧めです。)

<本の紹介>

エルサレムの小学5年生の女の子ノアはアリザ先生の提案で文通を始めることにします。けれどもこれは普通の文通とは少しちがいます。アリザ先生の言葉をかりれば、文通相手は「問題をかかえた子ども」なのです。クラスで10人が先生の提案に手を挙げました。そして、ノアの手紙に返事をくれたのはドゥディという男の子でした。

ドゥディは脳性マヒで歩くことも、自分で車椅子を運転することもできません。ドゥディの手紙には、彼の家に遊びに来た人がどんな風にドゥディを見るか、ドゥディが両親に世話をかけていることをどんな風を感じているかが正直に書かれていました。

もし、あなたが、脳性マヒの男の子からそんな手紙をもらったらどんな返事を書きますか？

ノアは疑問に思うこと(例えばドゥディがなぜ自分で運転できる車イスに乗らないのか?とか)は素直に聞いて、ドゥディのいいところは素直にほめる返事を書きます。そして二人の文通が始まりました。どちらかが同情する関係ではなく、本当の友情が始まったのです。もちろん、気持ちを素直にぶつけ合うことでお互いの気持ちをわかりあうのに時間がかかることもありました。けれども二人の友情はこわれるどころか、どんどん深まっていったのです。

ノアは文通を始めた頃からドゥディにぜひ会いたいと手紙に書きます。けれども、ドゥディはノアと仲良くなればなるほど、自分のみっともない姿を見られることをおそれ会うのを先のばしにします。けれどもついに、ノアはドゥディを説得することに成功したのです。そして、約束の日がやってきました。

<子どもに手渡すときのポイント>

障がいのある男の子と同年の女の子の友情を爽やかに描いた感動作です。障がいのある子どもが世間にどんな風に扱ってほしいのか、何を恐れているのかが率直に描かれ、それに応えるノアの姿勢は大人の私たちが見逃していることを気付かせてくれます。

表紙だけではなかなか内容の良さが伝わらない本（私自身、読んでみるまでこんなに良い作品とは思いませんでした）なので、ぜひ子どもに紹介して手渡してほしい 1 冊です。



このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店にあります。
ぜひ手に取ってみてください。

子ども図書館 重村 さやか